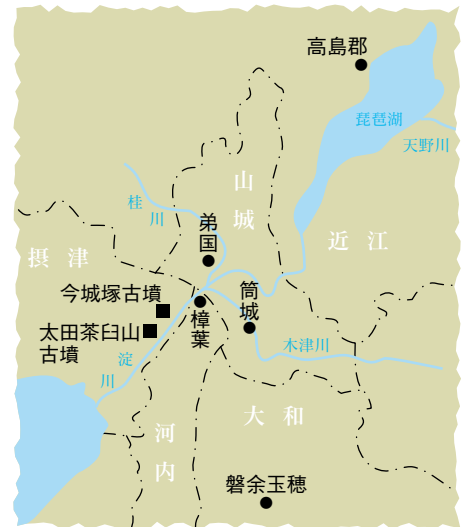


特集

# 継体天皇ゆかりの地を訪ねて

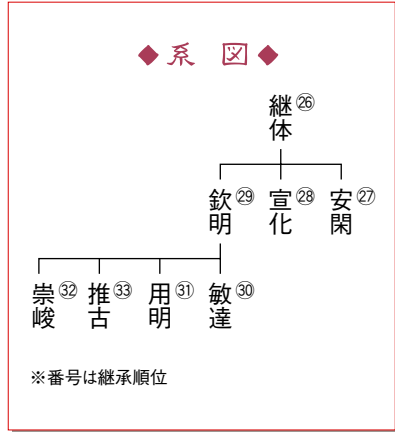
福井市の憩いの場である足羽山、そこに鎮座する足羽神社の境内に、本居宣長門下で飛騨高山の国学者田中大秀が継体天皇の御世系を研究し、これを世に広めるため建立した「継体天皇御世系碑」があります。そこには、応神天皇から継体天皇までの系図が掘られています。確かにことはわかっていません。戦後は王朝交代説も強力に主張されています。今回は、越前から出て即位した継体天皇ゆかりの地を訪ねてみることにしましょう。



まずは誕生の地、近江に向け出発しましょう。

## —プロローグ—

継体天皇が越前を出て即位するのは507年2月のこととされています。なお、「天皇」の呼称が成立するのは天武朝以降のことで、それまでは「大王」



と呼称されていましたが、ここでは混乱をさけるため「天皇」で表記を統一します。ちなみに「天皇」の呼称が統一されるのは明治憲法以降とされ、それまでは「帝」や「禁裏」、「主上」とさまざまな呼称が併存していたようです。名は「古事記」では袁本杵、『日本書紀』では男大迹、『上宮記』では乎富等と表記されていますが、発音は「オオド」または「オオト」と考えられています。父は彦主人王、母は振媛です。

『日本書紀』に、「継体天皇の父彦主人王は近江の高島郡三尾（現滋賀県高島市）の別業にいたが、越前三国坂中井の振媛を妃に迎え、継体を生んだ。

しかし、継体が幼少の時、彦主人王が没したため、母の振媛は継体を連れて故郷の坂中井の高岡（現在の坂井市丸岡）へ戻り養育した」とされています。

そしてオオドが57歳の時、武烈天皇が後嗣定めないまま没したため、有力豪族で大連の伴金村が中心となり他の豪族と協議してオオドを越前から迎え、推戴したとされます。

継体天皇の出自については諸説がありますが、近江で生まれ越前で育ち、即位したとするのが現在の大勢のようです。

では継体の父である彦主人王とは、どのような人物だったのでしょうか。継体伝説ゆかりの地を巡るにあたって、



彦主人王墓



もたれ石



息長陵



山津照神社



息長橋より天野川上流をみる

すにとどまっています。

## ◆継体天皇の即位の地 樟葉◆

継体天皇は507年に即位した後、3回遷宮を行っています。最初の即位の地は樟葉宮で、その後筒城、弟国と移り最後にヤマトに入り磐余に遷宮しました。ヤマト入りまでに20年近くかかっています。このため「なぜヤマトの地で即位しなかったのか」「ヤマトに入るまで20年もかかったのは何故か」ということがこれまで継体天皇の謎として議論の対象になってきました。戦後は王朝交代説も主張されるようになってきます。諡号の「継体」そのものが、新しい王朝を意味していると見ることができま

『日本書紀』は応神天皇の五世の孫としていますが、これは天皇の五世までを皇親と認めるという考えに基づいて記紀編纂時に挿入されたものと考え

ことができるからです。その意味では継体天皇は現在の天皇家の祖ということになります。

ここではこの問題には深入りせず、早速最初の宮で即位の地である樟葉宮跡に行ってみましょう。

樟葉宮については、現在の大阪府枚方市楠葉丘2丁目にある交野天神社附近とされています。樟葉中学校の近くの住宅街の中にあります。京阪電鉄本線の樟葉駅から歩いていくこともできます。なお、車で行かれた場合には交野天神社前の2、3台の駐車できるスペースがありますので、そこに停めることができます。

交野天神社入口には伝承地の石柱が建立されていますが、奥の林を抜けると貴船神社があり、石階段の登り口、登った所にも石柱が建立されています。説明板も用意されています。

この場所は、地図で見ると淀川、木津川、桂川が合流する地点で、三大河川を支配管理するには絶好の立地であることがわかります。ヤマトに入らずにこの地に最初の宮を置いたのは、大伴金村からの推戴の話を受諾したときから、豪族間の勢力争いに巻き込まれることなく権力の強化に努めたいとする継体天皇の最初からの政権構想であったのかも知れません。

うがった見方をすれば、越前、近江、

石が「もたれ石」として伝承され、安産祈願として石をなでた手でお腹をさする習わしが残っているなど、継体伝説の最初の訪問地にふさわしい場所です。

さて、彦主人王は近江の高島郡三尾の別業に居たとされていますが、別業とは現在の支店（営業所）にあたり、裏をかえせば彦主人王を出した氏族は別の場所を本拠とし、三尾もその支配地の一部であったことになります。では何処を本拠にした氏族だったのでしょうか。今日想定されているのは、琵琶湖の対岸にあたる、天野川の中流から下流域を支配していた息長氏とされています。早速、今度は琵琶湖の反対側長浜から米原付近に行ってみましょう。

現在も米原駅は北陸線と東海道線の乗換駅となっていますが、美濃方面と越（北陸）方面へ分岐する交通の要地であり、天野川河口は大津方面や琵琶